

經濟論叢

第139卷 第1号

菱山泉教授記念號

献 辞	池 上 惇	
經濟表のプロブレマティーク	平 田 清 明	1
ロックにおける貨幣数量説のミクロ的基礎	根 岸 隆	22
関係レントとその分配交渉	浅 沼 萬 里	39
消費者余剰とローザンヌ学派	山 下 博	61
均斉成長の不均衡動学分析	山 谷 恵 俊	82
機械化と労働雇用	塩 沢 由 典	109
1930年代の経済学再考	伊 東 光 晴	130
資本の限界効率と使用者費用	瀬地山 敏	156

菱山 泉 教授 略歴・著作目録

昭和62年1月

京 都 大 學 經 濟 學 會

経済表の⁴プロブレマティーク

平 田 清 明

は し が き

このたびケネー『経済表』とその関係諸論稿の新訳を世に送る機会を得た。これまで底本の関係上、翻訳のなかった『経済表』原表第3版の邦訳を、そこに含めることができたのは、またとない幸いであった。

『表』の線分をたどり、そこでの説明のあとを追い、関連する諸論稿の一字一字を邦語に写し直す作業の中で、私は、通い慣れたはずの諸表における範疇展開のいくつかの場面で、あらためてこの『表』、および、そこに示された諸テーゼについて考え直す機会に遭遇した。本稿では、そのいくつかのものを提示することによって、学史研究の資を提供したいと思う。

I 経済表原表第三版をめぐる

よく知られているように経済表には、大別して、1758年～9年に書かれ「ジグザグ」または「大表」と呼ばれてきた表（日本では原表といわれる）、ついでこの原表に示された仔細な図形表現を要約した「略表」（1763年）、そして最後に「範式」と命名されてきた造形表現（1766～7年）という三種類の表がある。

そのそれぞれには、表そのものの説明があり、また、それをふまえてのより具体的な政策提言や、より根源的な経済哲学が、付記せられている。

表の造形表現は、原表、略表、範式の三段階を経ており、そこに示された図形は、一種の形態言語であり、経済学的諸範疇の幾何学表現である。したがってこの表の構図の変遷は、経済表体系を構成する諸命題ならびに諸系論の純化整備過程を示すものであり、逐一に追跡され解析される必要のあるものである。

その作業を行なうにあたって、各表に近接して布置されているケネー自身の説明が参照されるべきであることは、あらためて言うまでもないだろう。同時にまた、そこに、関連する経済哲学的論述が付記されていれば、これまた重大な解読手がかりを提供するものとして尊重されるべきであろう。

今回紹介する論稿は、表そのものを踏まえそれを基礎とするものであるが、同時に、表が前提する歴史的社会的条件ならびに表の実現に必要な諸施策を論述しており、その問題圏は表そのものより広く深いものであって、ケネー研究のうえで重大な新資料である。

私はかつて表の造形表現を辿りながら、それに関連する諸論稿の理論的思想的な意義を問う作業を拙著『経済科学の創造』（岩波書店、1965年）において試みたことがある。今回、表ならびに関連論稿のすべてにつき、その原テキストを邦訳するにあたって、あらたに知りえたこと、また、学史研究として世代をこえて温められて然るべきかと思われることを、以下に記していきたいと思う。

1. 原表第3版問題

原表はその「第1版」が、1758年12月頃ベルサイユ宮殿中で印刷されたが、ケネー自身によって湮滅させられたと言われ、今日に至るまで未発見。ただ鉛筆書きの草稿が1889年 S. バウアーによってパリの Archives Nationales（国立資料館）で発見された。同じ時、同じ文書類中に、バウアーは「第2版」の「校正刷り」を発見。これが、同じく発見された『経済表の説明』とともに1894年イギリス経済学協会によって公刊され、経済表の底本として長く扱われてきた。日本では東京商科大学福田徳三教授研究室で大正11年複写され、学会に流布した。しかしケネー研究の泰斗 G. シェルの指摘によって「第3版」の存在することが、早くから知られていた。そしてその所在が不明であった。

ところが1958年、フランスで経済表の生誕200年を記念する刊行物『フランソワ・ケネーとフィジオクラシー』が、これまでの常識と異なることを情報として提供した。すなわち、これまで表に関するケネー自身の解説を追うにあた

ってまず最初に依拠すべきものとされてきた文献『経済表の説明』が、「第3版の一部をなすものだ」（いいかえれば第2版ではない）と指摘したのである¹⁾。

ところが、この説明の布置されているはずの「第3版」の表が、その直前にも直後にもなく、そこにあるのは第1版なのである。（また第2版なのである——後述）。この記念刊行書には「第3表はここに再録しない」と注記されているのみなのである。

第3版はどこにいったのか？

1965年東ドイツのユルゲン・クチンスキー教授夫人マルグリーテ・クチンスキーが、突如として、第3版原文と称するものとそのドイツ語訳を公表した。ところがその第3版の「表」とは、これまで底本とされてきた第2版のそれと全く同一物なのである。そしてこの表に『経済表の説明』が付せられているのである。そして両者の連関は、ケネー自身の校正跡によって実証されている、というのであった。これは、それを所蔵していたアメリカの Eleutherian Mills Historical Library からクチンスキー夫人に送られたマイクロフィルムによって確認されたものである。坂田太郎教授は、かねて、これとは違うことを予想していたのであるが、1966年に、同図書館においてこのことを確認した。また1967年この図書館を訪ねた私は、そこでの責任者の説明を受けつつ、オリジナルを検討して、この事実を確めた。さらに1983年、井上泰夫氏の同館訪問によって、（第3版とその関連論稿を含む）経済表の諸表とその関接諸論稿のすべにつきフォトリコピーをとることが許された。

その結果これまで第2版とみなされてきたのは、イギリス経済学協会の誤認にもとづく定説であって、これまで見慣れてきた“第2版表”こそ第3版であり、“第2版”付属の『説明』とはまさしく、この第3版の『説明』だということが確認されたのであった。“定説”は覆ったのである。

1) François Quesnay & Physiocratie, II. Textes Annotés, Institut National D'études Démographiques, Paris 1968. p. 675.

そこであらたに出てくる問題は、では第2版とは何か、ということである。

これまで“第2版”に2つの表があり、前半表と後半表と言い慣われてきたのであったが、その後半表が、実は第2版であったのである。念のために指摘するが、これまで“第2版”とされてきたのは、“第2版前半表”と言われてきたものであり、真実にはこれが第3版であったのである²⁾。

ここで、第3版はどこに行ったかという問題は、第2版とは何かという問題となったのである。そして表はずでに、出揃っていたのであった。日本では大正11年福田研究室で複写されて以降、第3版を人は眺めてきたのである。

しかし問題は、依然として存在する。

それは表の説明それ自体よりも、それにかかわる政策や哲学論稿に微妙な変化がみられるということである。

今回の新訳による第3版には、また第2版にも、それぞれに關説する政哲論著が、「シュリ氏王国經濟の抜粹」という名で付されている。それは第2版で23項目、第3版で24項目の提言からなるものである。ところが第3版のそれは、第2版のそれより圧倒的に記述が多く、それ自体一個独立の著作として公刊されるに値するほどのものなのである。

事実この第3版抜粹の含む諸テーゼは、經濟表範式段階の政哲論著『農業國の經濟的統治の箴言』の中に多くが収録されているのであるが、この『箴言』は独立論文として発表されたのである。

したがって、戦前以来の原表第3版問題とは、実はこの第3版の『シュリ氏王国經濟の抜粹』の特徴は何か、ということに帰着するのである。紙幅の關係上、第2版のそれとの照合を個々・具体的におこなうことができないので、その概要を次のように示すことにしたい。

2. 第3版の諸特徴

2) 原表第3版をめぐる文献史的探索については、坂田太郎「ケネー『經濟表』第3版覚書」(政経論叢, 第36巻第5・6号)が、氏自身の調査旅行の報告をかねて、この間の事情を物語っている。

第3版の「抜粋」は、その表題が第2版と同様、*Extraits des économies royales de M. de Sully* である。この表題中 *économies royales* の語が複数であることに注意。それは「王国経倫の諸法」と意識した方が、原意をより適切に示すものである。また *Extraits* は、たんなる抜粋ではなく「精髓」または「要諦」を意味する。両者を合してケネーは、かつてシュリ公がアンリ4世に提示した有名な「箴言」36条になぞらえたのである。しかし私はいまここではこれまでの邦訳名に従って、この表題を「シュリ氏王国経済の抜粋」として示しておく。記述上の混乱を避けるためである。(なお「経済」(エコノミー)については後述)

この「抜粋」はまさしくケネー自身の「王国経倫諸法の要諦」である。彼自身がのちにこれを「箴言」等に翻案したとき、彼およびその門弟たちは、これを「経済法典」と呼びもしたのである。

(1) 再生産と租税

この第3版「抜粋」は、まず第一に、生産資本の再生産過程が内包する諸結節のそれぞれに食いつむ多種多様の租税を系統的に批判する論述である。農業経営者に賦課される物的ならびに人的な諸税、一切の間接税、輸出入税、内国関税、交通税。さらに、徴税吏をかねた金融業者の不当な利子等々が抉り出される。「抜粋」冒頭から読者は租税本質論と租税形態論の噴流に遭遇するのである。そしてそのいずれにあっても、「富の永続する再生産」を保障するための予防措置が語られるのである。

政治経済学と課税の原理

——収入の再生産と租税形態——

これが全叙述の基本テーマである。この意味において「抜粋」は、まさに「近代経済学」の生誕を告示するものである。そこでは、再生産とは本質的に社会的分配そのものである。そしてそれは、自らの全過程を通じて、社会としての経済構造を形成するものとされる。

ケネーは、資本を、端初に投下され諸過程を経過したのち最終的に還帰する

価値、しかも、剰余たる収入を伴って還帰する価値として把握した。そして、かかる不断の更新としての過程に注目しつつ、この資本に「前払い」という名称を与える。

したがって彼は提言するのである。

「国民の繁栄を保証するものは、耕作の前払いであり、ついで収入と租税である」。(第3版『抜粋』7項)

「農業国民の繁栄を成り立たせるものは、収入と租税を永続させ増加させる巨大な前払いであり、自由にして容易な国内商業と対外貿易であり、土地の年年の富の享受である、要するに収入と租税との、貨幣による豊富な支払いである」。(第3版『抜粋』22項)

「富の真の原因と富を増大させ永続的にする諸手段との認識においてこそ、王国の経済統治の科学は存立するのである」。(第3版『抜粋』末尾)

これらの言葉はまさしく1759年12月執筆され、後々まで保存され、ほぼ同じ表現で1767年の「箴言」にも見られる。

裏返して言えば、原表第3版は表以前の諸論稿とくに『租税論』段階からの飛躍を示している。(表以前では、コルベール批判は、その力点が飲酒税や塩税などの特徴的なものに置かれていて、いまだ再生産の過程総体に対する租税転嫁の累積的弊害に及んでいない)。

他方それは、後年の「箴言」におけるような政府形態論を欠いている。かの「デスポティスム・レガル」のテーゼは、未だ、その姿を現わさない。

しかし逆に、再生産と租税の連関にこそ、ひとはまず第一に留意すべきだ、という「エコノミスト」の声を、後の世にまで届けている。

「継続して再生する富の源泉に対して直接に、そしてそれに比例して課税することこそが、最も簡単で最も整序された課税形態である。それこそが、国家にとって最大の利益があり、納税者にとって一番安くつく課税形態である」。(第3版「前文」)

このように、土地単一税論という名で知られるようになる税制を、彼は主張

するのであるが、現実の社会と国家の状態にあっては、その実行がさしあたっては、不可能であることを察知して、とり急ぎなすべきこととして何よりもまず、「〔農業の経営者たる〕フェルミエに課せられる恣意的課税形態を直ちに廃止すること」を提案するのである。（第3版『抜粋』7項）

(2) 生産資本循環の自然史的叙述

ケネーにあっては社会的剰余を伴って回収される資本が「生産的支出」であり、剰余を伴わずそれ自身を維持するだけの価値は「不生産的支出」であると社会的に規定される。前者は「農業、草原、牧野、森林、鉱山、漁業等」に用いられ、「穀物、飲料、木材、家畜、手工加工品等の原料」等の形をとる。後者は手工業と商業に用いられるもので、「手工業商品、居宅、衣裳、金利、奴婢、商業経費、外国製製品」等の形をとる。

無論この支出が「富の永続」の過程として遂行されるに当っては、その間を貨幣が媒介する。

各支出（＝資本）の循環過程において貨幣は、直接には流過程の車輪たるものであるが、同時に、（上記の生産的および不生産的な諸支出が相互に必要なものを購入しあうことによって）、諸資本の再生過程を達成させる媒介者たるものである。

かくして貨幣は、それら（支出＝）資本のそれぞれの循環過程が相互につくり出す交錯を、1個の流通体系として実現させるものである。

貨幣はこの機能においてきわめて重要である。したがってこの機能の中断としての貨幣滞留は、再生産の支障そのものであり、そのシグナルである。いわんや、意図的になされた退蔵貨幣すなわち「金銭的富 fortune pécuniaire」は、不正の租税と同断である。

表にあっては不生産的支出の当事者は、生産的支出の担当者および従事者が産出した第一次産品を、社会の必要とする形態に変形し、社会内の必要な場所に移動させる。この分業があってこそ生産的支出は、純生産的＝純収入をあげることができる。この意味において両者は不可分である。要するに両種の支出

が相互に相俟って社会的生産有機体を「一機構」として成立させるのである。

「自己再生機構」=「自然の加工産物の再生産と持続」の体制、これがエコノミー・ポリティークの要諦なのである。

ここで *économie* のケネー的用法に注意する必要がある。彼は終生医師であったが、経済学者である前に生理学者として、*Essai physique sur l'économie animale* という浩瀚な医書を刊行していた。この書名の邦訳としては「動物生理の自然学的論考」と題するのが適当である³⁾。ここでエコノミーとはこの当時「動植物の組織を規制する諸法則の総体」⁴⁾を意味し、エコロジーと同一位相に立っていたことに注意。

今ケネーは社会のエコノミーをその諸結節において範疇化しつつ、それをロゴスとして再編しようとする。したがってそこでは人間は、それら諸範疇の人格化としてある。「生産的支出の階級」と「不生産的支出の階級」との両者が、相互に織りなす関連。その間に介入する「収入の支出の階級」の役割。これは、それ自体として見れば、事物の社会的関係である。しかしそれは一個の社会的生産有機体である。「前払いと収入との関連」が社会的に規定され、それがまた、人類にとって永遠の必然事たる資料変換の自然史的過程である、とされている。

そこでは生産過程は社会的であると同時に自然的なものとして把握される。第3版抜粋でケネーが人間的労働を次のように重層記述しているのは興味深い。

「純生産物を産むのは人間的労働である」

「これあるがゆえに、前払いは支出をこえて純生産物を得る」

だが「人間的労働だけでもたらされるのは、人間の生活資料の経費だけである」。

3) この書はフィジオクワンシーの始祖における経済学がいかなるものから生まれたかを示す意味できわめて重要な文献である。ただし近世初頭の医学ないし生理学の知識を必要とするので、読みこなすのはきわめて困難である。かつて私は、すぐれた医師であった故栗野龍氏の助力を得て、この邦訳に着手したが、完成させえなかった。拙稿「ケネーにおける動物生理学と政治経済学」(一橋論叢, 1951年, 第26巻4号)はその時の覚書である。

4) Liuré, E. *Dictionnaire de langue française*, II. p. 433.

「収入と租税をもたらず純生産物が得られるのは、人間の労働によってよりも家畜によってである」——ここに家畜として示されているのは「四頭立ての馬でひく竿」のことである。

人間の労働の生産性＝自然性。これは生産過程の自然史的叙述の典型であろう。フィジオクラシーの自然主義的性格は、良きにつけ悪しきにつけ、原表第3版抜粋に明らかである。

ここで私は原表第1版以来の諸版を顧みる。そこに再び見出される表は、なんと血の通った社会的個人としての社会体であることか。とくに左右両側に説明の語を書き連ねた第1版と第2版は、まさしく葉の生い茂る「生命の樹」(ケネー)である。

(3) 再生産基準としての「良価」

ケネーは、日本の学史の通説に反して、「財」と「富」との区別をきわめて強調していた。このことが最初に記述されたのも、この第3版抜粋においてである。

「使用価値を有するが売上価値を有しない財を、使用価値と売上価値とを有する富とを、一国内で区別しなければならない。」(第12項(b))

この場合の売上価値が自由競争のもとでの安定した市場価格であることこそ、「豊饒」の第1義なのである。それは「売り手の平均価格」と「買い手の平均価格」とが合致した状態である。

しかし売り手と買い手とは市場で出あう対等な諸個人ではあるが、実は販売も購買も社会的な集合性において行なわれるのであり、それらを行なう人間も、実は、「生産的支出の階級」「不生産的支出の階級」「収入の支出の階級」なのである。したがってそこには、二種類の資本(＝「支出」)および「収入」との間の相互連関があるのであり、それが「表」の示すごとく均整をとれている場合、そこに「良価」と呼ばれる市場価値が成立しているのだ。したがって、この良価は、正常な再生産の要件を、個別的にも社会的にも、示し出そうとするものである。

この意味で良価とは再生産基準としての市場価値なのである。

「豊饒による無価値は富ではなく、不足による高価は不幸である。豊饒による高価こそ繁栄である」(第12項本文)という、ケネーの名とともに知られるアフォリズムは、実はこの意味での良価の箴言的表現であり、具体的には社会的生産力の発展を保証する社会的生産諸条件の経済表的均斉を意味しているのである。

したがって、そこに成立する価値および素材の相互補填関係こそ、正常的＝自然的な販路をなすものであり、そこに必要なのは、社会的な自由競争の上での社会的バランスなのである。それゆえケネーにとっては、過度の節儉や貯蓄はむしろ非社会的なのであり、自然物および加工品の消費とそれを媒介する貨幣の支出とが美徳なのであった。つまり生産的支出の階級と不生産的支出の階級が、その投下資本を社会的に生産的に支出しつつ循環させることが望ましいのであり、収入を消費する人々(「地主・主権者・十分の一税徴収者」)は、その地位にふさわしく「生活資料の奢侈」を行なうと同時に、社会が必要とする公共投資すなわち「運河の建設や道路の河川の修理のような、富の増大を助長する公共事業」に熱意を注がねばならないのであった。

社会資本の投入によるインフラストラクチャーの高度化を実現させつつ社会的な生産諸関係の調整を可能ならしめる諸要件を、諸種の表に図解表示して、「経済統治」の基本を明示すること。これが原表第3版のケネーに特徴的なことがらであり、この基本姿勢こそが、爾後の体系構築にとって礎石となってゆくものである。

II 経済学史におけるケネーとスミス(再考)

原表第3版に関してはなお仔細な文献史的検討が必要であるが、それは別稿に譲って、私はここで、経済学史におけるケネーとスミスという古くからあるテーマについて、今おもうことを記しておきたい。

(1) 古典経済学の2潮流

表とその解説、ならびに、これに関連する政哲論稿をワンセットとして捉えるとき、ケネー経済表体系は近代市民社会の解剖学たる経済学の一古典である、と私はいまさらのように思う。

これまでケネーの学説（「フィジオクラシー」）を、アダム・スミスの命名にかかる Agricultural System として把握して、これに“重農主義”の名を冠し、ケネーをスミスの先行者の一人と見なすのが、この国の学史研究の常例となってきた。しかし、この種の位置づけは、ごく初歩的な教育上の要請に応える順序づけであるとはいえ、学史研究の上で思わざる錯誤を招くという事態を出現させてきた、と私には思われる。スミスにおいて価値＝剰余価値論が、リカードにおいて価値＝分配論が、再生産過程分析において体系構築の中軸を得ねばならぬまさにその次元で、両者いずれも挫折し果てる、という事実のもつ学史的意味を、裏側から反省するとき、再生産＝蓄積＝分配の過程的連関を範疇展開したケネーの存在が、大きく浮かび上がってくる。

リカードにとってはケネーなる人物は、海峡の向こうの“忘れられた経済学者”の一人であったにちがいない。しかしアダムス・スミスにとってケネーは、「ケンブリッジの鑄」をそぎ落とすためにおこなわれる習慣になっていたフランス留学での重大な訪問先であり、その主著『国富論』の刊行にあたっては、これを捧げようとしていた当の人物である。

スミスにおけるケネー的なものは、リカードで断絶したのだろうか。彼らの時期の英仏両国における経済史的発展、つまり大革命前夜のフランス、産業革命前夜のイギリス、そして最後に産業革命終了時のイギリスにおける社会経済史的発展の諸段階＝諸形態、及びそのうえでの国民的差異。これらを超えての経済理論の継承と断絶という問題は、それ独自の存在理由をもち続けている。

ひるがえって後進国ドイツ出身のマルクスが、パリにおいて初めて経済学を学び、海峡をこえてロンドンに定住して「経済学批判」の努力を続けたとき、彼の眼前には、ケネーとシスモンディが、スミスとリカードに並存していたのであった。そしてそれぞれの潮流の始祖にボアギュベールとペティの名が冠さ

れていた。

マルクスはこの2系列の経済学を彼自身の古典として批判的に継承した。海峡の兩岸に育ってきた理論的問題圏をどのような範疇展開で統一するかが、彼自身にとって体系構築の要諦そのものに他ならなかった。体系的批判による批判的体系の成就が、彼の課題であった。

戦後の日本において、この古典経済学の二潮流の提起する問題を、それとして真正面から追究する努力が、ある時点以降、急速に消失してきたと感じられてならない。学史研究がますます彫琢されていった反面、問うべき当の重大課題が後景に退いていったのではなからうか、と思われる。以下に記すことは、そのような研究状況では検討の対象として狙上にのぼせられず、また、のぼすに値しないと思われがちであったことである。あえてそれをここに取り上げるのは実は、長きにわたって黙殺されてきたことのなかに意外なことが伏在している、と思われるからである。

(2)イギリス古典経済学の問題点

よく知られているようにスミスは、労働の生産性を（農業を始めとする）採取業に限定したケネーの狭隘さを批判して、農業と工業を industry の一義性にとらえ、農工分割の上に成立する社会的分業体制の基礎理論として価値論を創造し、農工両部面の生産資本循環（P…P）に立脚した再生産=蓄積論を展開した。高島善哉、大河内一男の両先達以来この国に発達したスミス研究は、内田義彦『経済学の生誕』（未来社1953年）において、刊行時点で考えられる限りでの理論分析の最高峰に達した。スミスの思想やその人物像にかかる biographical な研究もまた、その補助的な役割を果たしている。

それらの研究においては、当のスミスは、リカードとの関連において、またマルクスとの関連において、考察される。その長所も短所もともどもに、スミスの後続者の眼から評価される。

スミスにおける投下労働価値説と支配労働価値説との共存、ならびに、その混同が、リカードによって批判されるとき、このリカード自身はスミスとともに

に価値分解論と価値構成論を共有していた。

なぜリカードはスミスにおける労働価値説の“混乱”を批判して、いわゆる投下労働価値一元論を純化しながら、スミスと同じく価値構成論と価値分解論の共存＝混同という体系的錯誤を継承するのか。

それは、これまでの学史研究においては、本質分析の方法と現象記述の方法とがスミスとリカードの両者に共有されているからである、とされてきた。そして本質分析的なるものは科学的＝古典的であり、現象記述的なるものは通俗的＝俗流的なるものであるとされてきた。

そこには本質と現象という素朴な弁証法が、前提されている。しかし本質と現象という対概念が弁証法として生きうるためには、実は、近代市民社会における現象は社会的諸関係の物化としてあり、また人格の物象化としてある、ということが、見忘れられてはならないのであった。また、ここで本質とは、社会的諸関係を自己自身の成立条件＝制限とするところの生産諸力の潜勢状態なのだということ、そしてこれら両者の連関が経済的社会形成の諸過程において具体的に問わねばならないのだ、ということ、これが忘れられてはならないのである。したがって、本質分析と現象記述の共存という指摘は、それだけでは何もものをも語らないのである。

いま私たちは、スミスとリカードにおいて価値と価値形態が混同され、労働力と労働とが同一視され、不変・可変資本と固定・流動資本とが混和しているということを知っている。

それらのうちで、価値と価値形態の区別は、価値のノミナリズムとリアリズムとの対決抜きには成立しえぬものであり、労働力と労働との混同も社会的形態規定が勝義の意味で問題なのである。

ところが不変・可変資本と固定・流動資本の混同とは、資本循環過程における生産資本と流通資本との混同の上で、流通資本上の固定・流動両資本の区別だけを強調することに他ならない。生産資本、たとえば機械は、その耐用年数の多年性にもとづいて、資本流通過程において固定資本の規定を受け、原料や

賃金は、1年以内に回収されるので流動資本と定義される。

スミスとリカードが固定資本と流動資本をその再生産論の基礎範疇としたとき、そこで示されていたものは、以上のものであった。

しかしスミスはそこに、年々に或いは多年的に補填されるべきもので人間的労働を生産的たらしめるに役立つ資本価値部分が存在することを知っていた。流動資本の一部（原料等）と固定資本がそれであること、これは彼の眼前に見るものであった。

海峡の彼方のケネーは、人間的労働はそれらのものを備えてこそ生産的労働たりうるのだということを根本的な社会認識と見なしていた。したがって商工業階級の前払いにもこの部分が存在することを見抜いてもいた（表にはあえて出さなかったが）。そして大農経営に立つ「ラブルール」（農業経営者）の前払いには、巨額の非人格的な資金（不変資本）が入用であることを、彼自身の調査に基いて確認し、それを理論化していた。そしてとくに、農業経営創設にあたっての投下資本を「原前払い」を名付けたのであり、生産手段の独自の範疇的存在をそこに明示していたのであった。

海峡の彼方で識別されていたこの範疇が、当時のイギリスで、つまり農業も工業も大きな飛躍をとげてフランスを凌駕していたイギリスにおいて、どうして忘失されえたのだろうか。

(3) 「スミスのドグマ」

この範疇の忘却（ないし解消）は、後年のマルクスによって「スミスのドグマ」と命名されること、ひとの知る通りである。スミスまたは古典経済学の内在的研究者は、この評語を拒否するか無視するか、のいずれかをとる。他方、マルクス主義文献では「スミスの愚鈍」を示すものとしてこの語が揶揄的に語られる。

しかしこれは、揶揄し去ってよいほど軽薄なことではなく、また無視し去ってよいほどネグリジブルな瑕疵であるでもない。

スミスの資本分析においては不変資本価値の理論的取り扱いが混濁しており、

この価値部分はそのが体化している生産物（道具・原料など）の産出にかかわった人々の収入に還元される。つまりすべての生産物は、その生産に参加した当事者たる資本家、労働者、および地主の収入からなるのであり、したがってまた、これら諸収入に分解されうるものである。

しばしば我が国で示されるように、このドグマは次のごとく表示される。

$$\begin{aligned}
 W^0 &= C^0 + V^0 + M^0 \\
 W^1 &= C^1 + V^1 + M^1 \\
 W^2 &= C^2 + V^2 + M^2 \\
 &\vdots \quad \quad \quad \vdots \\
 W^0 &= \sum_{i=0}^{\infty} (V+M)^i
 \end{aligned}$$

ただしこのドグマなるものについて、次のことが注意される必要がある。

イ. これは共時的関係ではなく、通時的な過程の累積効果を示す。無限の遡及過程が、再生産過程分析におけるスミスの脳裏に浮かんでいるのである。

ロ. 個別資本の循環についてはスミス自身がこの不変資本部分の存在を知っていたのであり、したがって、社会の「総収入」と「純収入」の区別を通じて、この資本部分の存在を確認していたのであった。

ハ. それにもかかわらず、彼はあえて書いたのである。「借地農の資本を補填するために〔地代、労働、利潤の他に〕第4の部分が必要だと思われるかもしれない。しかし、考察されねばならないのは、なんらかの農具、例えば役馬の価格は、それ自身が再び、上述の三部分に分解されるのだ、ということである。」（『諸国民の富』岩波文庫、第1巻、192）

スミスは一体なぜ、彼自身がその存在を確認していた不変資本部分を、先行過程における収入（V+M）に還元してゆくのだろうか。

端的に言って、彼にあっては資本が、生産資本として把握されているからである。また生産資本によって人類永遠の物質代謝過程が実現されるがゆえに、その循環過程それ自体が自然史的過程として思われてくるからである。

彼は、市民社会における諸階級の葛藤に対して、ただならぬ注意の眼をそそ

ぎつつ、これを考察し続けてきた人物であり、そのような理論構成につとめてきた思弁家でもあった。しかし、その立脚する視座そのものもつ根底的な規定性格——自然史的性格を脱することができなかった。というよりも自然史的性格の理論構成を積極的に表現しようとさえしたのである。そこに彼の経験論の真正さがあった。

彼はこの基礎視座をケネーから学んでいた。そして、この基礎視座に固有な偏見（自然史的偏見）を、ケネー以上に赤裸々に、表明していくのである。

スミスにおける「フィジオクラートの誤謬への逆戻り」はきわめて顕著であって、それを示す1のことは、労働をめぐる“重農主義的偏見”の倍加昂進である。「農耕においては人間と並んで自然も労働する。自然の労働は価値を有する」。「借地農業者の役畜もまた生産的労働者である」。(岩波文庫、第2巻、398)

広くは自然が、そして狭くは役畜が、人間的労働を生産的たらしめる、ということとはフィジオクラートの基本テーゼの一つであるが、始祖ケネーは、そのようなテーゼを労働価値論として提起したのではなかった。ところがスミスは、いま、ケネー的狭隘さを超えるべく価値論を創造しようとしながら、このフィジオクラートの謬見を自説の中にあえて記述してやまないのである。

墓石の中のケネーは、自分を尊敬してくれるこのスコットランドの道徳哲学者が自分自身の自己矛盾に気がつかぬことに、さぞや心を痛めたことだろう。そして言っただろう、“自分なら、とうてい、こうまでは言えない”，と。

なぜ、この師弟の双方が同一テーゼを共有するのか。しかも、異なる再生産認識に到達するのだろうか。ここが問題である。

(4)「ドグマ」なるものの根拠

スミスはなぜ無限遡及するのか。それは彼が生産資本循環の現在に立って未来を展望すると同時に、過去をば、現在を用意するエレメントとして外挿法的にのみ回顧するからである。生産資本循環に立脚する社会＝歴史認識。これが現時点の価値たる不変資本を前時点での生産的活動の所産そのものたらしめる

のである。

それはたんに簿記の記帳上の問題ではない。また、個別資本と社会資本との分析手続き上の相違の無視ということでもない。それは、一定の視座に立つ以上は不可避なことなのであり、その視座が排他的に固執される場合には、自己矛盾の自覚を自ら圧殺しさえするものなのである。

別図はそれを批判的に開示する解析図である。

私たちは、ここで、以下に掲げる衆知の言葉に耳をかたむける心の余裕をもってよいだろう。

「再生産過程の重要契機としての更新形態において不変資本価値の再現を見ないこと……この点にこそスミスの愚鈍さがある」。(*Das Kapital* Bd. 2. S. 364)

「スミスにおいては『固定』と『流動』という言葉が決定的な区別として把握され固持されていること、そこに、スミスにおける退歩がある」。(Das Kapital Bd. 2. S. 364)

「スミスはケネーの正しい分析に対していらぬ手を加えた」「ケネーの『原前払い』と『年払い』を『固定資本』『流動資本』とに一般化したばかりでなく、しばしば重農主義的誤謬にスミスは全く逆もどりしている」(*Das Kapital* Bd. 2. S. 362)

この「再生産過程分析におけるアダム・スミスの退歩」が「眼にあまるもの」であるので、マルクスは、かの再生産表式論を『資本』第2巻で展開する前に、「この対象についての従来の叙述」という章をもうけ、そこでケネーとスミスとをとり上げながら、その叙述のほとんど十分の九をスミス批判に当てたのであった。

なぜそうしたのだろうか。

スミスの「退歩」が重大な体系的な意味をもつからである。つまり $(V+M)$ への C の還元の後には、価値分解物と価値構成物とが同一事象として展開され、資本主義的生産過程分析と分配＝領有過程分析とが同等なものとしてされるからで

されていたのである⁵⁾。たったいま述べた社会的な形態規定（資本と収入）に対応した、社会的な規模での財の集合が確保されるうえで、このことが必要不可欠だったのである。

この商品資本循環に立つとき、社会的総生産物の諸使用価値が、同質の交換価値でその大きさを度量され総括されて、その社会的集合性において明示される。しかし価値たるものは、つねに流通過程の結果として人目に現われてくるものであり、本質的に事後的なもの post festium⁶⁾ である。——価値概念の本質は、まさしくこの一点にかかわる。そして、社会の法原理たる私的所有と根源性をともにしている。

私たちは見る——前払い=資本の両形態相互の関連と、これら前払いと収入との関連。そのようなものとして構造化された社会という「再生産機械」においては、現在は生産過程と流通過程とが必ずしも調和的に継続するものではなく、使用価値上の「過剰」と交換価値の「無価値」とが連鎖するところの自己矛盾的体系である。この体系は、それを制度として構造化する本源的エレメントとして、たえず私的所有を措定し、再措定しつづける。

ケネーは、ほかならぬ原表第3版「抜粋」において、指摘している。

「各人は自分の利害や能力、自分の土地の素質にあった生産物を、自分の畑で、自由に、耕作すること、このことによってこそ最大の生産物が土地からひき出されうなのだ」。(第22項)

個人としてのこの自由はまさしく経済表における三階級間の社会関係のシステムティックな均整化（正常化）を保証するものでもあった。

そしてこの社会的生産諸関係の上で現在を用意するものを遡及するとき現わ

5) この点の自覚は、ケネーが農業資本の循環を経済表の範型として絶えず脳裡に浮かべていたこと、とくに、循環の起点を播種ではなく収穫において把握していたことに基く。

6) 過去の帰結あるいは総括として、完了態にあるところの現存在の自己意識。「商品は、交換価値としては、つねに結果の観点だけから考察される」(マルクス「経済学批判」(商品論))。『資本』においてもマルクスは、この概念を随所に用いて、事態の哲学的心理学的境位を示している。フランスの精神科医 J. Gabel が、それから学んで Ante Festium を対概念とする Post Festium の範疇を精神医学と社会科学に汎通するものとして措定した。J. Gabel: Lafausse conscience 1968, Paris.

れるものが、経済表の冒頭に出てくる始源なのである。

それはなによりもまず、社会における三階級の存在であり、そして生産的支出の階級が自己の階級を再生産するだけでなく他の二階級の必要とする生活資料を提供し、かつ自己の生産手段補填分を不断に再生産するだけの生産性を社会的に保持しようということである。

このことはまさしく、原表段階で確立され、最終の範式に至るまで変わることがないのだ。

端的に言って $P \cdots P$ では生産諸力が、 $W' \cdots W'$ では生産諸関係が所与として、はるかなる始源に、措定されるのであり、不断に措定し続けられるのである。ここにスミスとケネーとの、同一性の上での差別性が存在する。

III 結語にかえて

学史研究の常道とは逆に、ケネーからスミスを見ることによって、スミスの弱点と長所の内在的理解を深めることが、今、必要であると思われる。このことはかつてマルクスも試みていたことでもあった⁷⁾。

「[生産物価値と価値生産物との区別と差異に関する] 分析においてスミスが、彼の後継者のすべてと全く同一な地点にしか到達しえなかった、と批判しても、仕方がないのだ。実は、正しいものへの萌芽は、すでにフィジオクラートのもとで発見されていたのであるが、スミスが混沌のうちに踏み迷ってしまったのである。商品価値一般に関する彼の Esoterish な見解が、Exoterish な見解とたえず交錯しており、しかも、多くの場合この Exoterish な見解が優位を占めているのであるが、ときには彼の Wissenschaftlich な本能がこの Esoterish な立場を再現させて見せてくれている」。(Bd. II. S. 380)。

7) この点とくにマルクスの『経済表』をめぐっては、安孫子誠男「社会的剰余の発見とマルクス『経済表』」(上, 中-1, 中-2, 下) (千葉大学教養部研究報告 A-13, 14, 14 統, 15 が委細をつくしている。

8) この点は前記の Post Festium とともに展開する予定であったが、紙幅の余裕を得なかった。他日を期したい。

ここで Esoterish と Exoterish とは「秘教」と「顕教」の対比概念であり、前者は内密の秘儀を、後者は通俗の祭儀を示す⁸²。

スミスは $P \cdots P$ 循環に内在することによってまさしく内面の秘儀を語り出した。スミスの「Wissenschaftlich な本能」とマルクスが呼び、また「経済学におけるルター」とマルクスがスミスを評したのは、このことに注目してのことである。

すべてが生産的労働の聖なる火から始まるスミスの、勤労の体系は、価値分解＝構成論という虚構の構築にささえられて、資本主義的産業社会の「経済」を、骨格なき軟体動物の永遠の「生理」として、表白していくのである。

ケネーから見たスミス。

これを私は、ケネーの新訳を終えていま、眼前にする。それが果たして正当であるかどうか、より仔細な吟味を要するであろう。しかしここに「経済学の両始祖の根底を培ったものを改めて掘り起すことによって、学史研究における一つの問題設定を試みた。古拙の偉大さを現代にいかしえたか、はなはだ不安であるが、これをもってひとまず責をふさぐことにさせて頂きたい。

(終り)